

## どうする！？ 尿からアプローチするタスク・シフト/シェア

◎伊藤 彰洋<sup>1)</sup>

JA 愛知厚生連 豊田厚生病院<sup>1)</sup>

本講演は一般検査の特に尿検査からタスク・シフト/シェアをどのように展開していくのがテーマである。尿検査といえば、尿定性・尿沈渣や尿生化学が挙げられる。臨床検査技師のタスク・シフト/シェア業務は、従来の法制度で実施可能な業務内容は生理学的検査・輸血検査・病理検査が中心であり、法改正により追加された業務は検体採取や生理学的検査の拡大、静脈路確保である。これらの業務は尿検査と関連性が乏しい。

大前提としてタスク・シフト/シェアの目的は、医師や看護師の業務負担軽減とともに各職種が専門性を活かして医療の質を向上させることである。ここに着目し視点を変え、当院の取り組みを踏まえつつ尿検査の検査前後のプロセスからタスク・シフト/シェアを考える。

検査前プロセスには、検査の依頼・検体の採取・検体の受領と搬送・検体受付が含まれる。検査の依頼について、尿検査に関する項目を尿定性あるいは尿定性尿沈渣のみの設定としている施設は多いのではないかと。ここに、尿沈渣の項目として変形赤血球や好酸球、マルベリー小体といった項目を別途追加で設定する。依頼医に尿定性尿沈渣と共にこれらの項目をオーダーしてもらうことで、鏡検担当者は該当項目を意識しながら観察するため検出感度が向上し検査の質の向上が見込まれる。また検体採取において、膀胱留置カテーテルからの採尿を我々臨床検査技師が実施することはタスク・シフト/シェアになる。

検査後プロセスには、結果報告・検体保管・データや情報管理が含まれる。結果報告において、尿沈渣にて異型細胞を認めた場合に細胞診検査追加や泌尿器科コンサル、変形赤血球（あるいは赤血球円柱）を検出した場合に腎臓内科コンサル、マルベリー小体を検出した場合は $\alpha$ -ガラクトシダーゼ活性測定や遺伝子検査を追加、といった提案はアドバイスサービスであるがタスク・シフト/シェアともいえるのではないかと。

検査前後のプロセスにて提案した内容は、病院情報システム（HIS）の運用や臨床との協議の基で実施可能な事例であると考えられる。各施設の事情に合わせて、我々臨床検査技師の専門性を活かしながら尿検査の質を向上させることでタスク・シフト/シェアを展開していくことが望ましい。その結果として目的である医療の質の向上につながることを期待する。